

子どもと共に歩む「BIWAKO TIME」実践の様子

※写真はイメージであり、過去のものを含みます。

B領域「人と自然」指導の実際

「BIWAKO TIME」では、生徒が主体的に調査研究活動を進めることが中心になります。必修教科では、各教科の授業を進めるのが教師の役割。「BIWAKO TIME」では、教師は何を指導し、どのように生徒の活動に関わっているのでしょうか。

1. 「BIWAKO TIME」との出会い…全体ガイダンス

1～3年生の全校生徒を目の前にして、それぞれの領域別のねらいを、担当する教員が順に紹介していく場です。教員1人の持ち時間は10分。

自然とともに生きている滋賀の人々のドキュメント、それが領域「人と自然」の研究テーマです。そこで最初に、巨大な冊がはめこまれた川底をスライドで見せます。全校生徒は「これは一体何だろう」と疑問を持ちます。そこでヒントを出していきます。コンクリートの壁、水着で飛び込む子どもの姿、棚田の石垣…。「もしかしてダムかな」と生徒が気付き始めたところで、滋賀県で初めて建設されたダムを見せ、それをつくった「近江7賢人」の物語を始めました。そのダムは今も健在なのか？そこへ行って確かめたいという期待感を高めたところでプレゼンテーションを終了。

「調べて発表する」だけでは面白くない、考えて行動して新しい価値を見いだす心構えを持つことの大切さを訴えてガイダンスを終えました。



■全体ガイダンスの様子

2. B領域のスタート

B領域「人と自然」を希望して集まった生徒は60名。全員が第一希望です。全員を多目的教室に集め、取り組んでみたいテーマやBTへの抱負について、みんなの前で、1人1分のスピーチをさせます。1分間という短い時間にやってみたいと思うことを伝え、仲間を集めるのです。

河童伝説は真実か、外来魚は駆除できるか、もしもこの町に地震が起こったらなど。自分の世界へ誘（いざな）うような3年生の上手な発表をほめると、1年生、2年生も張り切ります。生徒は、プリントに、どの人のどのテーマで調査研究活動をしたいのか理由も含めて第3希望まで書きました。その結果を集計して、異学年合同の5～7人のグループを作ります。1つのテーマに多くの希望が集まっているところは、3年生を2つに分けて2つのグループとしました。テーマの希望を優先させたため、3年生以上の活動をしたいと主張した2年生リーダーのグループが1つと、2年生が1人も入らないグループが1つできましたが、担当教師2人で話し合っ、各学年とも2人以上となるグループに分けることができました。



■みんなでアイデアを出し合う

3. いよいよグループごとに活動開始

ここから生徒は2つの教室（ベースルーム）へ分かれて、グループ活動を開始します。

B領域「人と自然」は2人の教師で、それぞれ5～6グループを担当します。

グループには学年に応じた役割分担があること、図書室やコンピュータ室の利用申請や校外での活動申請、電話でのアポ取りなどは、事前に約束することを確認します。そしていよいよグループごとの活動を始めます。

まず、自己紹介をして、リーダーと副リーダーを選びます。リーダーは役割分担をしていつも全員が取り組んでいるように目配りをする係、副リーダーは校外・サテライト活動申請書や物品借用・購入願などの事務処理に責任があります。これは3年生が引き受けました。

そして、リーダーが司会をしてグループで具体的な内容とそれに見合った計画を立てます。グループでなければ解決できないような内容を考えたグループをほめ、長期間取り組むだけの価値のある計画になるように支援します。例えば、「河童伝説を探しながら、川端（かばた）というものを利用する人たちの、水をきれいに使う秘訣を取材する」グループは、取材予定日を決めて、その日までに資料集めと取材内容を決めること、取材後に総括をして中間発表の資料を作ることを第1の期間とし、その後、取材したことに基づいて実験や行動をすること、本発表の準備をすることを第2の期間として設定するように助言しました。生徒たちは、お互いに競い合うような気持ちで取り組む様子でした。

最後に各リーダーから内容の報告と振り返りをさせます。時間の終わりには、ワークブックを利用して、その時間の反省をします。今後ともワークブックに書きこむ習慣がつくように、机を戻して各自が机にしっかりと向かう時間をつくりました。



■異学年で進めるグループ活動

4. 出会いの準備を進める

活動を始めた生徒の様子を見ていると、1,2年生は内容に応じた資料集めを、3年生はどこでだれと出会うかを探すように分かれるグループがほとんどでした。図書室の書籍から調べる、職員室の電話帳で探す、インターネットで検索する…。図書室、職員室、コンピュータ室などのサテライト教室では、担当教師に質問したり、教えられたりなど、生徒たちは、ここでも多くのことを学んでいきます。

ベースルームでは「思うような人が見つからない」と自信をなくしているグループに、出たい人を探するルートをいくつか紹介して、こちらから積極的にアプローチするように勇気づけました。また、生徒にとって、電話でアポをとる(約束をする)のは一大事です。「出会う約束の電話をする時には、どう言えばいいの?」という質問には、①「相手の気持ちを考える」②「名前を告げる、目的を告げる、許可を得る、お礼を言う」というアドバイスをします。生徒が電話でアポを取るのと並行して、教師側からは、予め電話で確認をしたり、依頼状とともに生徒からの質問内容を送付したりしました。中には、質問内容に対する答えや関連資料をあらかじめ準備しておいてくださる方もあり、教師からもお願いすることによって、当日の出会いがより充実したものになります。

また、「ちゃんと出会ってもらえるのかな?」「どんなことを聞けばいいのだろう?」という不安もつづいてきました。そこで、出会う時のマナーや、具体的な取材の方法について、きめ細かくアドバイスをしました。予備知識なしでは、出会った時のインタビューも浅いものになってしまいます。このころになるとワークブックには、さまざまな書籍やインターネットで調べて、充実した出会いのための準備を進めていくうちに、だんだんと出会いが楽しみになってきたという意見が増えてきました。



■インターネットで情報収集

5. 自然や人、社会との出会い

「BIWAKO TIME」では、午後から滋賀県のいろいろな方面へ出向くことができる日も設定してあります。いよいよ出発の日、生徒たちは、グループで調べた交通機関の時刻を何度も確認し、約束した時間に遅れないように出発しました。

「川端」を取材したグループは、小雨の中、役場の方と新旭町針江の集落を巡りました。水の郷ということだけあって、水路には梅花藻の花が咲き乱れ、地元の子どもたちが川で水遊びをしていました。何軒かの家で、実際に屋内の川端を見せていただきました。この辺りはどこも自噴水があるとのことで、飲料水や洗い水などに利用しており、残飯を鯉が食べ、随所に水を汚さない工夫が見られました。「河童はいますか?」「聞いたことないねえ。」とおじいさんの返事。「この水はいつから使っているのですか?」「ずっと前から大切に使っている。」と豆腐屋さん。「飲んでよいですか?」「消毒も入っていない、一番おいしい水だよ。」「甘いです。」と水を飲み歩き、集落の方々と楽しく会話しました。

挨拶をしっかりしたり、聞き取りした内容をきちんとメモしたり、後で礼状を送るために宛先を聞いたりする生徒の態度に感心していただきました。とくに、情報生活科での学習成果がよくあらわれて、写真やビデオ撮影時に「後で学校発表に利用したいと思うので、撮らせていただけますか」と許可をいただくなど、聞き手としてのマナーをしっかり守れたようでした。学校へ帰って来ると、まず最初にインタビューのお礼を一人一人が書き、それをリーダーがチェックして、学校からの礼状を添えて送付します。



■人と出会って学ぶ面白さ

6. 中間発表に向けて

中間発表に向けて、何を伝えたいのか内容を整理して、どのように発表すれば、注目される発表になるのかを相談します。うまく聞き手に伝わるようにするにはどうすればよいのか、しかも著作権や肖像権に配慮しながら、適切なメディアを活用して準備します。生徒は、調べてきたすべてを盛り込もうとして、あれもこれも発表したがるものです。大切なポイントに重点を置き、細かいことは聞かれたときに答えられるように、整理しておくことをアドバイスしました。「深い研究をした人ほど、すっきりした発表ができるんだよ。」と、だらだらした発表をしないように指導しました。

7. グループの交流を進める中間発表

中間発表は、学習の途中で自分たちの目標を確かめ、新たな課題を見つけることがねらいです。ベースルームを会場として、各グループ5分から10分程度の発表を行い、グループ間でお互いにアドバイスをします。発表に用いるメディアは、OHPを基本として、模造紙など短時間で用意できるものを選びました。

環境保全に取り組む施設を訪れて湧き水を調査したグループ、大津市や京都市の消防局を訪ねて地震対策をまとめたグループ…。ほとんどのグループが魅力的な研究を進めています。川端の取材に出かけたグループは、他のグループの成果に驚き、もっと自分たちの研究を深める必要があると感じました。



■これまでの経過を報告

8. さらに進める調査研究活動

夏休みは、まとまって時間を取ることができる絶好の機会です。多くのグループが、校外への調査活動に出かけました。可能な日は教師が引率しますが、保護者に引率をお願いすることもあります。調査中は、生徒主体の活動になるよう、教師はできるだけ安全面だけに気を配るようにします。

- 湧き水を調査したグループは、滋賀の奥地を訪ねて硫化水素を含む鉱泉を発見しました。
- 消防局を訪ねたグループは神戸の被災地を訪れて生の体験談を聞きました。
- 2年生リーダーのグループは、外来魚を駆除している団体と琵琶湖に釣りに出かけて説明を聞き、環境についての認識を深めました。
- 川端を調査したグループは夏休み中の活動は行いませんでした。そして学校が始まると、ものづくりのサテライト・技術室で、1年生が川端の模型づくりを、理科室のサテライトで2、3年生が水質浄化の実験を始めました。それぞれのサテライト教室の担当者のアドバイスを受け、目的を達成できるようにがんばっていました。
- 水質浄化チームは100ppmのリン酸濃度を作るのに困っていましたが、理科の自由研究で水質に取り組んでいた友だちのアドバイスを受けて、無事成功しました。



■実際に釣りをして確かめる

9. ポスターセッション

最終発表会の直前に、全校生徒を3つの会場に分け、全グループが5分程度のポスターセッションを行います。ポスターセッションは、発表者と聞く人との距離が近い上に、少人数での発表となり、活発な質疑や議論が行われます。また聞く側の生徒は、どのグループの発表を聞いてもよいので、魅力的な発表を心がけないと、誰にも発表を聞いてもらえません。

どのグループも、県内各地に足を運び、自分たちの目で確かめた自信があります。中間発表会でまとめた発表をベースとして、その後の調査研究を堂々と発表していきます。1年生も自分たちが動き、内容をよく理解しているので、3年生の前でも堂々と発表をしました。2、3年生は発表をすることよりも他のグループの発表を積極的に聞いてまわり、領域代表の発表に選ばれるための最後のヒントを集めているようでした。

そして、いよいよ本発表の準備に取りかかります。生徒たちは、紙芝居や劇、あるいはコンピュータによるプレゼンテーションなど、趣向をこらして発表準備を進めていきました。最終的に、生徒たちはどのような発表をするのか、教師側もたいへん楽しみになってきます。



■見る側も楽しいポスターセッション

10. 領域代表の選出

いよいよ領域代表の決定です。「人と自然」の領域から全校生徒の前で発表できるのはたった1グループなのです。まず、ベースルームで発表会を持ち、各教室から3グループを投票で決めました。これがいわば予選です。そして大きな会場に領域の生徒全員が集まって、6つのグループから1グループを決める発表会を行いました。2回目の発表なので、生徒たちはとても上手に発表します。投票の結果、川端を調査したグループに決定しました。

11. 全体発表

川端を調査したグループは、その研究内容も魅力的ですが、発表がたいへん素晴らしいものでした。選択授業で学んだビデオ編集と、情報生活科で学んだプレゼンテーションによって、見る人を思わず夢中にさせる素晴らしい発表をします。また会場で聞いている生徒にインタビューしたり、その場で実験をしたりするなど、製作している錯覚をさせるような、どきどきさせる発表が繰り広げられました。



■会場が一体となる全体発表会

おわりに

すべてのグループの活動を支援するためには、いつもリーダーより一步先回りして、次の活動を読んでおくことが大切。困ったときこそ、生徒から頼りにされる教師でありたいと考えています。今年も生徒たちは「BIWAKO TIME」の活動を通して、日に日に成長していきました。また教師にとっても、県下のさまざまな分野で活躍する人々と出会えることは、たいへん勉強になります。これからも生徒と教師がお互いに高め合いながら、この魅力あふれる「BIWAKO TIME」に取り組んでいきたいと思えます。

平成17(2005)年度 B領域担当：澤田一彦

■ まとめ ■

今回の調査によって明らかになった、総合学習「びわ湖学習」、 「BIWAKO TIME」22年間の取り組みの成果を、以下に述べます。

■明らかになったこと

○「びわ湖学習」、 「BIWAKO TIME」の成果として、もっとも多くの在校生・卒業生が挙げているのが「郷土の再発見、再認識ができた」ということです。自分の住んでいる地域は、身近すぎるために、調べたり考えたりすることは少ないものです。私たちの郷土・滋賀について調査研究をする機会を提供する意義は大きいと考えます。郷土を愛する心は、ますます国際化が進むこれからの社会において非常に大切であり、改めて「びわ湖学習」、 「BIWAKO TIME」の効果を実感するものとなりました。

○次に多かったのは、自分たちが調べたことを、わかりやすく効果的に伝える方法を身に付けることができたというものです。研究グループ内で直接上級生から学んだことはもちろん、全校生徒の前で堂々と発表する上級生の姿を見るなどして、原稿のまとめ方や表現の仕方、メディアの活用法など、多くのことを学び取っています。3年間の学習経験を通して、人前でわかりやすくプレゼンテーションする力が、繰り返し鍛えられていきます。このような資質や能力は、特に中学校卒業後の学習や生活において、大きな力となって働いていることが明らかになりました。

○また、その次に顕著であったのは、「円滑な人間関係を学ぶことができた」というものです。「BIWAKO TIME」では、異学年混成で研究グループを組んでいるため、生徒は、教えられる立場の1年生から、教える立場の3年生までを経験することによって、集団としてのまとまりや、リーダーシップの必要性、人と協力することの大切さや難しさを、体験を通して学んでいます。さらに、校外に出てさまざまな人々と触れ合うことなどによっても、その効果は高められることが明らかになりました。

■22年間の継続による力

20年前の生徒のアンケート結果と比較すると、必修教科で学んだ知識や技能などを、総合学習の中で試そうとする生徒の割合が、過去と比較して伸びています。また、異学年混成や男女混成の研究グループを組むことを、肯定的に捉える生徒の割合が大きく伸びており、誰とでも協力して学習を進めようとする風土が、長年の学習を通してはぐくまれてきたといえます。

このことは本校に総合学習「BIWAKO TIME」がしっかりと定着し、生徒や教師が、「BIWAKO TIME」を意識して日々の学校生活を送っている証でもあります。このような学習環境は、一朝一夕に完成するものではなく、22年間にわたって工夫や改善を繰り返し、少しずつ形を変えながら、その時点で最善と思われる運用方法で継続してきた積み上げの力であると確信しています。言い換えると、数年間程度の試みでその方向性を変更していたとすれば、今日までにいわゆる“生きる力”を身に付けた卒業生を輩出することは不可能であったのです。